

## Faulkner の短篇小説 “ Tomorrow ” について

真 木 實

### 1. は し が き

ものおもへば澤の螢もわが身より  
あくがれいつる魂かとぞみる

和泉式部が、貴船明神に参詣の折、御手洗川で詠んだこの歌は、男女間の愛情をよみえて、真実に迫るものといえるが、Faulkner の “ Tomorrow ” は、同じく人間同士の愛情といっても、アメリカ南部山地の poor whites (貧農父子) と、ゆくりなくもその義子となった赤ん坊 (23年足らずの薄幸な生涯を送り、恋する娘と駈落ちしようとして、女の父親に射殺され、哀れな最後を遂げる) との間の愛の真実を諷きあげた短篇で、作品集 “ Knight's Gambit ” (中篇 1, 短篇 5, 1949) に収められたものである。この作品集について、Longley は云う：—

Some of them, particularly the one called “Tomorrow,” have a great deal to say that is true and permanent about the human heart ; still it is the hearts of the murderers and those who love or hate them that are put under scrutiny.<sup>(1)</sup>

即ち、Knight's Gambit ( “ Tomorrow ” は 1940 年に書かれた) は、Faulkner 中期の作品集で、彼はこれより前に、The Sound and

(注 1) J. L. Longley, JR : The Tragic Mask, p.39-40, Univ. of N. Carolina Press, 1963

the Fury (1929), Sartoris ('29), Sanctuary ('31), Light in August ('32), Absalom, Absalom! ('36), The Wild Palms ('39) 等の大物を世に問うており、中、短篇集であるが故に、必ずしも彼の全力量が発揮されているとは云えなくとも、十分に成熟して、読みごたえのある作品集である。探偵物の形をとったのは、Faulkner の器用さを示しているものといえよう：—

By the time he wrote these stories Faulkner already had much of his major work behind him ; the detective story form seems to have been one which excited his ingenuity without calling out the full extent of his powers<sup>(2)</sup> . . .

“ Tomorrow ” は、他の4の短篇と同様、弁護人(時には検事) Gavin Stevens の言動を、甥の Chick ( Charles Mallison ) が逐一叙述する形式で綴られているが、ただ、この “ Tomorrow ” は、現在48才余りの郡検事 Stevens が、20年以上も前、州立大学の法学部を卒業したてで、28才の時に、唯一件だけ、祖父の代りに殺人事件の弁護を引きうけた、その折の話しとして語られている。

とある夏の日(夏とはっきり言及はしてないが、最初の公判が秋の開廷期に行われ、その頃の Mississippi 州 Yoknapatawpha 郡の村落では、夕闇に螢飛び交い、鳴きやんだ蟬が樹間に飛び立つと描かれている) Frenchman's Bend 村の夜半に発生した、悪夢のような殺人事件の公判廷を第一の Setting において、被告 Bookwright と、その弁護人 G. Stevens, 判事連、12人の陪審員という顔ぶれで始まる。

## 2. 梗 概

① 導入部 (Introduction)<sup>(3)</sup> Mississippi 州 Yoknapatawpha 郡

(注2) Michael Millgate : The Achievement of William Faulkner, p.267, Random House, 1966

(注3) 元田脩一： 短篇小説の分析と技巧p. 6, 開文社, 昭和49年

Jefferson 裁判所の秋の開廷期。被告 Bookwright は、22マイル離れた Frenchman's Bend 村の堅実な富農で、妻もあり、父親でもある。被害者は、三年前、何処からともなくこの村に現われて住みついた、大言壮語型の無頼漢で、自称 Buck Thorpe、あだ名は Bucksnot。22才余り。親戚もなく、相手構わず喧嘩をふっかけ、賭博をやり、ウィスキーを密造し、家畜泥棒で逮捕されたこともある。

ところが、Bookwright の17才になる娘が、Buck の巧みな口前に乙女心をかき立てられたが、勿論父親は大反対。お定まりの説教、交際禁止、出入り差し止めから、夏の深夜の駈け落ちとなった。その朝まだき四時、Bookwright は治安判事 Will Varner を起こし、ピストルを手渡して、「私は、2時間前に、Buck Thorpe を殺しました」と自首してきた。そして、近所に製材工場をもつ Isham Quick が、現場で、手に半ば抜きとりかけたピストルを握った Thorpe の死体を発見。記事が Memphis の新聞にのって一週間もたつと、婚姻許可書を証拠に、Thorpe の妻だと名乗る女が、村に現われて、遺産があるなら渡してほしいと要求する。

諸々の状況から、正当防衛か何かで、起訴も免がれるかもという Chick の推量と異なり、大陪審では、証拠充分として裁判に廻されることになった。ここで、被告 Bookwright を弁護する Gavin の演説が始まる。「人間は、心の底では、正しいことを行いたいと欲し、他人を傷つけたいと望んではいない。けれども、人間は、慾望、感情、信念におけるあらゆる複雑性を、好むと好まざるとにかかわらず、先祖から受け継いでおり、この被告も、同じ古来からの複雑性を、自分の意志にかかわりなく受け継いだわが娘の問題に直面し、彼の能力と信念の及ぶ限りうまく処理しようとして、己れの決意と行為を固く守り抜いたのであります。」陪審員の評決も、十分間とかからずして無罪放免であろうとは、大方の推量するところであった。

陪審員が退廷しても、裁判長を始め、誰も出て行かなかった。早々に無罪の評決のであることを信じたからである。けれども、十分過ぎ、三十分過ぎても陪審員は姿を見せない。裁判長に耳うちされて廷吏が出てゆき、また戻ってきて裁判長に耳うちすると、裁判長は起立して休廷を宣した。午

后三時過ぎには、陪審員は唯一人の反対のために、11対1で、無評決審理に終わったことが、町じゅうに知れ渡り、終にこの件は、次の春の開廷期に再審理されることになる。その一人とは、30マイルも奥の山地に住む農夫で、Stonewall Jackson（南軍の勇将、1824 - 63）Fentry という、小柄な、見るからに労働に疲れ干からびた男である。

この一見して素朴、無教養な、恐らく被告 Bookwright の名さえも聞いたこともあるまいと思われる山地の労働農夫が、何故に、唯一人頑強に Bookwright の釈放に反対するのか。誠に奇怪な行動としか云いようがない。この謎を解こうと、G. Stevens は Chick を伴って、山地へ車を走らせる。

②展開部 (Development)<sup>(4)</sup> Jefferson の町から22マイルで Frenchman's Bend 村、そこから更に30マイル山地へ入った所は、松と齒染にとりかこまれた痩せ地で、玉蜀黍と棉花が、ここの僅かの住民と同じように痩せたままで生き耐えている。やがて、G. A. Fentry とへたな字で郵便箱に書かれた、二部屋建ての丸太小屋が開けっ放したままで、何年間も女手の入った跡もないことは、12才の Chick にもわかるのだった。

二人が門内へ足を踏み入れるや否や、「止まれ、一步も入ってはならんぞ！」と、痛んだ露台に突っ立って、怒りと中風のためブルブル身を震わせながら、猟銃を腰のあたりに構えた老人の声がかかる。裸足の上に、つぎの当たった、粗末で、ミルク色に褪せた木綿服を着、息子の Fentry よりも小男で、痩せこけている。「Fentry さんは……」と云いかけると、「おぬしらは、もうさんざんあれをいぢめつけとる。ここから出て行け。わしの地所から出て行け。」と大喝一声で、手のつけようもない。

やむを得ず、隣人に様子を聞こうと、1マイル足らず車を走らせた所に、今度はペンキ塗りの上に、上り段の脇にはペチュニアの花壇まであり、土地もずっと肥えている家を見つける。Rufus Pruitt とその母の住居である。露台で、野豌豆のさやをむきながら話す母とこどもも、Rufus は Jackson Fentry について語ってくれた。

(注4) Ibid, p.7

Fentry 一家は、Jackson の祖父の時から、あの痩せ地を開墾し、自分たちだけで暮して、細々ながら家族を養い、税金を納め、誰の厄介にもならなかった。けれども、一人前の男になってからも、親父と二人でたった一足の靴をわけあって履くという始末で、Jackson は女房をもらう余裕もない。おふくろも祖母も、過激の労働のため四十才足らずで死んでしまった。その Jackson がある晩 pruit の家へ来て、Frenchman's Bend 村の製材所に働き口を見付けた、留守中は黒人を一人雇って、親父の野良仕事を手伝わせることにしたと言って、山地を離れ、30マイルを歩いて村へ出て行ってしまった。

その年のクリスマスの日を実家で過ごすために、徒歩で30マイルを往復し、二年目のクリスマスには里帰りをしなかったが、三年目の三月初め、もう製材所にすっかり腰も落ちついた頃であろうと思っていた矢先に、突然山地へ戻って住みついたが、今度は徒歩で帰らず、一頭の山羊と赤ん坊をつれて、貸馬車に揺られて戻ってきた。

一週間余り経って、噂を聞いた Pruitt 夫人が Fentry の家へ行ってみると、赤ん坊は生まれてまだ二週間と経っていないで、山羊の乳だけでどうして生命をつないできたのか、奇蹟としか思えなかった。山羊は牡牛とちがって 二時間毎に乳をしぼってやらねばならない。ということは、Jackson は毎晩ほとんど眠れないということになる。おしめの布もなく、メリケン粉の袋を裂いて使っていたので、老婦人が布切れをこしらえて、再々訪ねて行ったそうである。

そして、「乳ばなれするまで、赤ん坊を私に預けなさいよ」と言っても、小さく、痩せ衰えた Jackson は、「ありがとうございます、奥さん。でもわたしはやってゆけます。」と答え、更に、「あんたが結婚したなんてこと、まるで聞きませんでしたかね…」と尋ねると、「スミスという女で、去年一緒になったが、赤ん坊を生み落とすと死んでしまいました。」と云う。

秋の蒔入れが終ると黒人を帰し、翌春になると Jackson は昔通りに、また親父さんと一緒に耕作を始めたが、坊やは、インディアンの用いる胴乱みたいなものを作ってそれに入れ、野良仕事の間は、その胴乱を柵の柱に

さげておくと、坊やはまるで羽根ぶとんにでもくまったように、スヤスヤ眠っていた。その春に坊やはよちよち歩きを覚え、Pruitt が柵の所で見ていると、畦の真ん中あたりまで一生懸命に Jackson の後を追って行き、終には Jackson はひき返して、その子を肩車にのせて、また鋤で仕事を始めていた。

夏の末にはずいぶん歩けるようになり、Jackson に棒切れと屋根板の切れっぱしで作ってもらった小さな草苧り鋤をもって、Jackson が腰ほどの高さの棉花を蒔っている近くで遊んでいるのが、姿は隠れていても、棉花の揺れでそれとわかるのだった。

老婦人も口をはさんで、「Jackson は坊やの着るものまで、一針一針手で縫ってつくっていました。私も一度だけ、服をこしらえて持って行ってあげました。また、その子を教会へつれて行って、洗礼を受けるようにすすめたのですが、あの人は、もう名はついていました。親父が、Jackson（南軍の勇将）と Longstreet（南部の有名な法律家、教育者、作家、1790-1870）をくっつけて Jackson & Longstreet Fentry というのです、って言ってました。」

Pruitt 氏は言う、「あの子は、まるで影が物にくっついているように、Jackson から離れようとはしませんでした。たまさかの買物まで、親父さんが出かけるくらいでした。たった一度 Jackson とあの子が離れた時といえば、Jackson が、年に一度の納税に Jefferson へ出掛けた時でしたが、その日私があの家へ行ってみると、あの子は寝台の隅っこにもぐりこんで、だまっただま、私の方をまたたきもせずのぞいていましたが、常日頃は仔犬のような子が、その時は、まるで昨夜獲られたばかりの狐か狼の仔そっくりに見えました。

ところが、その翌年の夏、あの赤ん坊が来てから二年半経った頃ですが、Jackson と子供が、ある朝突然にこの山地から姿を消してしまったのです。あとには爺さん一人で畑を耕したり、近づく者に猟銃を向けたりしていましたが、その次の年、また例の黒人を雇って畑仕事を手伝わせておりました。

それからまた五年経つと、Jackson はひょっこり山地へ舞い戻ってき

ました。そこでまた黒人がいなくなって、彼と親父さんとが、昔と変りなくあの土地を耕しておったのです。そこで或る日、私は我慢できなくなってあそこへ出かけて行って、あれは死んだのかい、Jackson？あの坊やだよ、と云ってやったのです。すると彼は、ただぼつりと、どの坊やだね？と返事するだけでしたよ。」

これだけのことを聞いて、Gavin と甥の Chick は、Pruitt 母子に礼を述べた後 Frenchman's Bend 村へ引き返し、Varner の店の露台で、死体の第一発見者でもあり、Jackson の働いていた製材所の経営者でもある Isham Quick から事情を聴くことになる。

Isham は云う。「Jackson を雇ったのは、うちの親父（Ben）でした。初めてのクリスマスには三日間家へ帰る暇をもらいましたが、翌年の夏までには製材所全体を彼に委せることが出来るようになり、秋ごろからは、親父も私も、殆んど出かけて見ることもしなかったです。すると翌年二月のある晴れた午後、私が久しぶりに製材所へ出かけてみると、彼の小屋に若い女がいましたが、骨と皮ばかりに瘦せて、病気で、おまけにあと一ヶ月もたたぬうちに赤ん坊が生まれ落ちるような腹を抱えていました。

で私は、あれは誰だい？と尋ねると、わしの女房ですと答えたので、いつからだい？去年の秋には女房なんていなかったじゃないか。しかもあの女の腹の子は一と月もたたぬうちに生まれるぜ、と云いましたが、彼はただ、わしらに出て行ってほしいのですかと言うだけなので、それ以上詮索がましいことは言えなくなりました。

この女は、後になってわかったことですが、父や兄弟たちが反対する男と好い仲になって妊娠したが、子供の出来たことを知ると、その男は行方をくらましてしまったのです。大きな腹を抱えたその女と Jackson が、どうして近ずきになったか、窮鳥ふところに入れば、の類か、そこらのところは不明ですが、とにかく彼の所に、その女は病気で身重の体を落ちつけていました。生まれてくる子のことを考えてのことでしょうか、Jackson は女に、わしらは結婚しようと言いましたが、女は、結婚できません、すでに夫のある身です、と言ったものです。

そのうち陣痛が起こって、ポロ蒲団の上に行くと、彼は産婆を呼び

にゆき、やがて男の子が生まれました。その時女は、もう二度と蒲団から起き上がることができないと判っていたのですが、虫の息で、結婚を承諾しました。それで Jackson は、自分が面倒を見させられていた製材所の騾馬をひき出し、7マイル離れた伝道師 Whitfield さんの所へ行き、夜明け頃に騾馬に乗せて戻ってきて、形ばかりの結婚式を済ますと、女は死に、彼と Whitfield さんとで埋葬しました。その晩 Jackson はうちへ来て、おやじに辞めると言って騾馬を戻し、小屋を片付けると、赤ん坊をつれて山地へ戻って行ったのです。

それから二年半経った夏のこと、あの女の二人の兄弟 Thorpe の奴らが、執達吏を伴い、型通りの書類をもってやって来て、法律によりあの子を引きとると主張しました。私は諸事情を話し、出産、結婚、埋葬のいきさつを述べたのですが、頑としてききいれません。それで、やむを得ず私は彼等を山地の Fentry の家へ案内してやりました。それも、夜じゅう馬車に揺られて到着いたのです。家は空っぽだったが、斧の音がするので裏へ廻ってみると、Jackson が薪を割っていましたが、私達の姿を見るや否や、傍にいる男の子に向って、「逃げろ。畑の爺さまのところへ駆けて行くんだ。」と云うのです。そして Thorpe の兄貴の方へ、斧をふり上げて打ちかかろうとしました。私がおの柄を抑え、Thorpe の兄貴が彼をつかんで抑えようとし、私は言いました。「よせ、Jackson、この人たちは法律に基づいてやっているのだぞ！」

その時、小さなものが、脚のあたりで私を蹴ったり、引っかいたりしているのです。あの子倅でした。声一つ立てず、ただ私や二人の兄弟のまわりにつめよって、Jackson が伐っていた木片で、できるだけ手をのばして、私らを殴りつけるのです。「こいつをつかまえて馬車へつれて行って、乗っけてしまえ。」と兄が弟に命令しました。弟がその子を抱き上げたものの、蹴ったりもがいたりし、そのくせ、相変わらず声一つ立てないのです。そのうちに、弟と子供の姿は見えなくなってしまいました。すると、今まで必死に抵抗していた Jackson は、がっくり参ってしまって、急に身体じゅうの骨がぐにゃぐにゃになったみたいでした。

私と兄貴とで彼を割木台の上におろして、喘ぎ喘ぎ、口から泡まで出し



ている彼に向かって言ったのです。「これは法律なんだよ。あのひとの亭主がまだ生きていたのだよ。」彼は呟くように云いました。「わかっています。予期していたことでした。ただ、こんな風にあまり不意だったので…」兄貴も、育ててもらったこれまでの礼を述べ、財布をとり出して彼の手の中におき、逃げるように山を去って行きました。

しばらくして Jackson は、正気ついたように割木台から起き直り、財布を握っている方の手をあげて、顔をぬぐい始めました — ハンカチでするように。その時まで、彼は自分の手中に何があるのか気付いていなかったようです。なぜって、彼は手をおろして、5秒くらい財布を不思議そうに眺めていたのですから。それから、それをポイとうしろの方へほうり投げました。そして立ち上がると、庭を通り抜けて森の中へ入って行き、小さくなり、見えなくなってしまいました。「Jackson ！」と私が呼んでも、ふり返りもしなかったのです。

そこで私は、その晩は、ここらへ見廻りに来たついでだといって、Pruitt さんの家に泊めてもらったのですが、あの子にまつわる朝の出来事には、一言も触れる気にはなれませんでした。翌朝 Rufus から 驟馬を借りて村へ帰ったのです。」

この日から、Jackson も子供の後を追うようにこの山地を離れ、5～6年後に、再び忽然と老父の所へ戻ってくるまで、Pruitt 母子は、杳として彼の消息を知らなかった。夏の一日、忽然として姿を消した Jackson と子供のことについて、親爺さんに尋ねてみる気もしなかったのである。

Isham Quick は言葉をつづけて語る、「それから月日は流れて17～8星霜、あのならず者 Bucksnot の奴が、命を落とすまでの3年間この村に腰をおちつけ、よくこの店へ来ては、飲んでもくれたり、喧嘩をしたり、他人をなぐりつけたりしていましたが、6ヶ月目くらいのある日、私が不図顔を上げてみると、向うの道の所に Jackson が驟馬に乗っていて、じっと Thorpe を眺めているのです。30マイルの道の土埃りが、驟馬の汗にこびりついていましてね。どのくらい前からか知らないが、一言も口をきかず、ただそこにじっとして Thorpe を見ていたのです。やがて驟馬の向きをかえして、もときた道を山路へと帰って行ったのです。

何しろ20年も前のことなので、あなたの陪審員が、Jackson Fentry 一人のために意見不一致になった話を聞くまでは、Buck Thorpe とあの男の子の関係など、思ってもみませんでしたよ。……勿論、Jackson は Bookwright 氏の釈放に賛成する気にはなれなかったのですよ。」

③ 終結部 (Conclusion)<sup>(5)</sup>

Varner の店を出て、Jefferson の町まで22マイルのドライブの車中での、Gavin と Chick の会話：—

‘Of course he wasn’t,’ Uncle Gavin said. ‘The lowly and invincible of the earth — to endure and endure and then endure, tomorrow and tomorrow and tomorrow. Of course he wasn’t going to vote Bookwright free.’<sup>(6)</sup>

「もちろん、あの男はそんな気持にはならないよ」ギャヴィン伯父が言った。「この世の低劣と不可抗 — 我慢に我慢を重ね、なお我慢し通さなければならぬのだな、明日も、また明日も、そのまた明日も。もちろんブックライトを放免するはずはなかったのだ」

「僕なら、した」と私が言った。「僕なら放免してやったでしょう。だって、バック・ソープは悪い奴だもの。あいつは —」

「いや、君だってやりやしない」ギャヴィン伯父は言った。ぐんぐん車をとぼしてはいたが、彼は片手で私の膝をぐいとかんだ。黄色い光線が黄色い道路の上を水平に照していた。虫がその光の中に舞いおりてきて、また上の方に飛び去って行った。「それは、大人になった、一人前の男になったバック・ソープじゃなかったのだよ。あの人がもしブックライトの立場におかれていたら、やはりブックライト同様、即座にあの男を撃つだろう。それというのは、ブックライトが殺したあの墮落した、非道の肉体のどこかに、まだ残っていたのだよ。おそらく精神ではなかろう、が、すくなくともあの子、つまりジャクソン・ロングストリート・フェントリの面影が残っていたのだよ。たとえ成人したその子にはそれがわからな

(注5) Ibid, p.12

(注6) Knight's Gambit, p.95, Chatto & Windus, 1969

ったにしても、フェントリにだけはわかっていたのだよ。だから、君だってやはり彼を放免しはしなかったろう。それを夢にも忘れてはいけないよ。決してね<sup>(7)</sup>」

この件は、翌年の春の開廷期に再審理の結果、Bookwright 氏は無罪放免となったが、その裁判に対して Jackson が、どのようなかわりかたをしたかについては、一言も触れてない。

付記： —

この2梗概の部では、上記(7)の訳本を参照させてもらったことを記して、感謝の意を表します。

### 3. G. Stevens と J. Fentry

(イ) G. Stevens は、50才をすぎまで独身で、人間の絆に縛られることなく、Sherlock Holmes に対する Mr. Watson の関係のような、甥 Charles を伴い、郡検事ながら、事件の裏の裏を洞察して、意外な事実の探索発掘に思うさま活躍する。

けれども、Sherlock Holmes の場合は、この私立探偵が鋭利な推理力を縦横に駆使して、難事件を解決してゆく過程に魅力の中心があるのに対し、Stevens の場合は、彼が、同胞南部人に対する深い人間愛から、正義の発掘、犯罪の防止に活躍する過程での、人間性の真実への洞察力や彼の人間味に魅力があり、Faulkner の代弁者（Howe は G. Stevens を Faulkner の “alter ego” と呼ぶ<sup>(8)</sup>）としての人道主義的な、楽天的倫理感が顔をのぞかせる所にある。

短篇集 “Knight's Gambit” の表紙裏に、次のような紹介が載せら

(注7) 大久保康雄訳・騎士の陥穽, p. 183, 雄鶏社, 昭和26年

(注8) Irving Howe: William Faulkner, p.284, Univ. of Chicago Press, 1975  
alter ego = other self

れている：—

In *knight's Gambit* William Faulkner takes as his central character Gavin Stevens . . . . Shrewd, observant, sympathetic to the quirks and foibles of his fellow-Southerners, he moves through the six episodes which make up this book. In each of them the motive force is crime ; in some its detection, in others its prevention — and a very ingenious detective Stevens proves to be. A strand of optimistic affirmation runs through the tales ; there is a spark of honour in almost every man, says the author. The task of justice is not merely to keep it alight but to fan it to an irradiating flame.<sup>(9)</sup> . . . .

赤祖父氏は次のように述べている：—

ギャヴィンについて論ずるには、その甥チャールズ・マリソン少年と切り離して考えることはできない。ギャヴィンの語りをさらに吟味してチャールズが読者に伝達するという関係を保っているからである。チャールズは絶えず影のようにギャヴィンについているが、同時に離れて客観的批判をすることも忘れていない。この代表例は「騎士の勝負」の各短篇である。これらはすべて刑事事件かその未遂についての推理物であるが、全知全能の探偵が猿まわしのように使われ、思わせぶりのサスペンスをこしらえてある、ありきたりの作品ではない。ギャヴィンが見事な推理と勇氣ある行動力で事件を解明し語るのに対して、チャールズ（場合によっては無名の語り手）は絶えずそれに密着し読者へ橋わたしをする。いわば、二重の語りの物語である。<sup>(10)</sup>

(ロ) Jackson の父親 G. A. Fentry は、一人息子には難攻不落の南軍の勇将 Stonewall Jackson の名を与え、赤ん坊には Jackson の上に、更に南部の偉大な文化人 Longstreet を加えて命名し、彼の心のおもむく所を

(注9) 上記(6) *Knight's Gambit* の前表紙裏

(注10) 赤祖父哲二：言葉と風土，p. 350，開文社，昭44年

示している。

ところが、Jackson は女の兄弟に、てもなく子供を奪われ、又赤ん坊は成人して、Fentry の願望とはおよそ裏はらのやくざ者となり、刑法の厄介になるような最後をとげるという皮肉な運命をたどる。これに始まったことではないが、この世の中のことは、とかく思うより何倍もまずい結果になるものである。

Faulkner は Rufus に、次のように述懐させている：—

And that wasn't the first time it ever occurred to me that this world ain't run like it ought to be run a heap of more times than what it is<sup>(11)</sup> . . .

Jackson Fentry は Faulkner の創作した人物だが、素朴且つ無教育ながら、人間としての純粋な愛や名誉や誇りの情と、人間の魂—同情、犠牲、忍耐の徳を失わない—を持つ特異な character で、読む者に忘れ得ぬ深い感動を与える：—

Faulkner has given us an astonishing variety of characters, unforgettably striking in their attitudes and traits, their speech and posture. One thinks of Benjy, . . . . Miss Emily, . . . . the Tennessee mountaineers. Becoming part of our experience, enriching and complicating it, they thrive in memory.<sup>(12)</sup>

. . . . in each of these stories, particularly in “Hand Upon the Waters” and “Tomorrow,” as distinct from the ordinary detective story, there are authentic human creations, people who are caught up in love and hate, altruism and greed ; in short, all the passions of the human heart.<sup>(13)</sup>

Jackson Fentry が、Yoknapatawpha Saga の他の場面に活躍してないのが心残りである：—

“Monk” and “Tomorrow,” for example, although not good stories, are sometimes moving ones, and none of the qualities which give them

(注11) 上記(6) Knight's Gambit, p.91 ~ 2

(注12) 上記(8) Irving Howe : W. Faulkner, p.303 ~ 4

(注13) 上記(1) Longley, JR : The Tragic Mask, p.26

interest derive from their “detective” aspects. . . . . In “Tomorrow” Faulkner creates in almost minimal terms at least one character, Jackson Fentry, whom he could readily have built up into a much more impressive figure<sup>(14)</sup> . . . . .

#### 4. 技 巧 と 文 体

“Tomorrow” は二つの語り部、① Fentry の隣人 Pruitt 母子と② Frenchman’s Bend 村の Isham Quick によって、その物語の骨子が運ばれてゆく。そして読者は、Faulkner の言葉の魔術に乗って、両者の語る山地の出来事と Frenchman’s Bend 村の出来事とを、タイムトラベラーのようにまのあたりに眺めながら、その両方を総合して、Fentry 父子と義理の息子 Buck Thorpe との関係を中心とする 諸事情を窺い知ることができる。

それによって Fentry の裁判所における奇怪な態度も、おのずから納得できるという、ゆるやかなカーヴの Surprise Ending である。これは Faulkner のよく使う手で、映画の Flashback, Cutback の手法でもある。通常の小説のように、ひと流れの時間の経過につれてストーリーが展開してゆくのではなく、

「時間を逆にたどって行って、前に記したような物語が展開される。フォークナーは、物理的な時間の流れを追わないで、うしろむきに現在から過去へとさかのぼる、つまり、作品を逆の方法でつづる、としばしばいわれるのは、このような作風をさしているのである。これはもちろん、二十世紀の小説として、さして珍らしい方法ではない。しかし、フォークナーほど、この方法を技巧的に用い、しかもほとんど破綻を見せない作家は少ない。」<sup>(15)</sup>

(注14) 上記(2) M. Millgate : The Achievement of W. Faulkner, p.266

(注15) 龍口直太郎・西川正身共訳：サンクチュアリ，p. 319～20，月曜書房，昭25年

William Faulkner was once asked how he shaped his novels. He replied : “There’s always a moment in experience — a thought — an incident — that’s there. Then all I do is work up to that moment. I figure out what must have happened before to lead people to that particular moment, and I work away from it, finding out how people act after that moment.”<sup>(16)</sup>

次に彼の文体について一言触れると、James Joyce 流の “stream — of — consciousness” method がその特徴である： —

As an artist he has not remained content with the familiar and well-worn. No other writer of our time except Joyce has so brilliantly exploited the stream-of-consciousness technique, and none has so successfully resisted the tendency of this technique to dissolve into its flow the structures of plot and character. No other writer in America has rebelled so vigorously against the “common style,” the cult of understatement and tepid irony ; and if the price of his rebellion has come high in rhetoric, so has the gain in poetry.<sup>(17)</sup> . . . .

Faulkner は、この技術に実に巧妙に長けていて、それだけ詩情に得るところはあるけれども、読者は、彼の意識の流れゆくままに迂余曲折のルートをたどることになり、彼の文体が難解と評される最大原因をなしている。“Tomorrow” から二、三の例を挙げる： —

④ . . . . I am talking about us who are not dead and what we don’t know — about all of us, human beings who at bottom want to do right, want not to harm others ; human beings with all the complexity of human passions and feelings and beliefs, in the accepting or rejecting of which we had no choice, trying to do the best we can with them or

(注16) Regina K. Fadiman : Faulkner’s Light in August, p.67, Univ. Press of Virginia, 1975

(注17) 上記(8) I. Howe : W. Faulkner, p.304

despite them – this defendant, another human being with that same complexity of passions and instincts and beliefs, faced by a problem – the inevitable misery of his child who, with the headstrong folly of youth – again that same old complexity which she, too, did not ask to inherit – was incapable of her own preservation – and solved that problem to the best of his ability and beliefs, asking help of no one, and then abode by his decision and his act.<sup>(18)</sup>

⊕ What I seem to have underestimated was his capacity for love. I reckon I figured that, coming from where he come from, he never had none a-tall, and for that same previous reason – that even the comprehension of love had done been lost out of him back down the generations where the first one of them had had to take his final choice between the pursuit of love and the pursuit of keeping on breathing.<sup>(19)</sup>

⊙ I don't know where he found her. I don't know if he found her somewhere, or if she just walked into the mill one day or one night and he looked up and seen her, and it was like the fellow says – nobody knows where or when love or lightning either is going to strike, except that it ain't going to strike there twice, because it don't have to.<sup>(20)</sup>

## 7. む す び

Faulkner は生まれ故郷南部を愛し、人間としての自己と、南部の退廃、没落（道徳的混乱と社会的腐敗）をじっと眺めて、自己を高めると共に、南部の没落を喰い止める方策を熟考した。“Tomorrow”の中では、ミシシッピー州の主要道路が全部 Memphis 市通りのように舗装され、アメリカの全家庭が自動車をもつ日がくることを祈った Stevens の言葉がそれを

(注18) 上記(6) Knight's Gambit, p.79

(注19) Ibid, p.89

(注20) Ibid, p.90



象徴している： —

. . . . Uncle Gavin said that some day all the main roads in Mississippi would be paved like the streets in Memphis and every family in America would own a car.<sup>(21)</sup>

短命で、か弱い人間（Faulkner は Zola 流の自然主義思想 — 人間に対する環境の不可抗的影響 — を信じた）が、自然やその試練に耐えて、永久に生きのび、繁栄してゆくには何が最も大切であるか。それに答えるために、芸術家としての Faulkner は、人情の複雑性と、その真実を究め、それを芸術品の中に描出しようとした。

而も、彼の作品は、その特徴として、単に冷静に観察されるのみではなく、生活され、吸収され、記憶されて忘れ得ないという性質をもつものである。事実、初期の Faulkner は、「悪徳の売人」とまで酷評されるくらい、その描く人物は、盲目的な墮落と、いろいろな悪徳に毒されているけれども、

「そうした人間そのものの下劣さや外部から押しつけられた下劣さに、結局はうち勝ってゆく、人間性質の永続的な要素にも、フォークナーは一度ならず敬意を表している。彼の人間の将来を信じる気持ちはその忍耐の能力に基づいたものであり、彼は人間以上のものによる救いはもち出していない。彼は好んで反動的な郷愁的な人生図をわれわれに提供してはいるが、おそらくメルヴィル以後、彼ほど全世界の多くの人たちのものの考え方に深い影響を及ぼしたアメリカ作家は、ほかにはいないように思われる。<sup>(22)</sup>

結局読者は Faulkner 自身の強い芸術家魂、彼の芸術家としての使命感（“What he sought and found and tried to capture was Truth”<sup>(23)</sup>）に精神を清められ、感動させられる。この意味で、彼は芸術家であると同時に、倫理道徳家でさえある。

ノーベル賞授賞演説（1950）の中で、人間の終末を受け入れることを

（注21） Ibid, p.94～5

（注22） 米国大使館文化交換局出版部：十人のアメリカの小説家，p. 30～1

（注23） James B. Meriwether 編：A Faulkner Miscellany, p.166, Univ. Press of Mississippi, 1974

拒んで、Faulkner は云う： —

“It is easy enough to say that man is immortal simply because he will endure : that when the last ding-dong of doom has clanged and faded from the last worthless rock hanging tideless in the last red and dying evening, that even then there will still be one more sound : that of his puny inexhaustible voice, still talking. I refuse to accept this. I believe that man will not merely endure : he will prevail. He is immortal, not because he alone among creatures has an inexhaustible voice, but because he has a soul, a spirit capable of compassion and sacrifice and endurance.”<sup>(24)</sup>

訳： 人間は、ただ、生き永らえるものなるが故に不滅だ、と言うのはたやすい。即ち、命数のいまわの鐘の音が鳴り終り、最後の、赤く滅びゆく夕まぐれに、永遠に垂れ下がり、今は価値なく朽ちなんとする一つの岩塊から、鐘の音色も褪せゆきし時、その時でさえも、なお別の音がある — 人間の、ちっぽけながら尽きることのない声が、なおも話しつつけているから — と言うのは、全くやさしいことです。けれども、私はこれを受け入れることができかねます。人間は単に生き永らえるだけではなく、繁栄してゆくものでもあると私は信じるものです。人間は不滅です。それは、あらゆる生物の中で、人間だけが、尽きることのない声を発するから、というわけではなく、実に、人間だけが魂を持ち、同情と犠牲と忍耐をなしうる霊、を所有しているが故にです。

完

(注24) Joseph Blotner : Faulkner, Vol. 2, p.1366, Chatto & Windus, 1974